

中国浙江省温州地域の椅子墳のいま

首都大学東京 何 彬

温州地域の墓は、地表に作られ、大きく椅子の形になっている「椅子墳」が有名であった。20世紀80年代後半に経済改革を率先して行い、先に裕福になった人々は再生産への投資より真っ先に祖先の墓を修繕するに大金をかかって大きな石やセメントで作られてため、山一面に馬蹄形の横穴式の「椅子墳」は多く現れ、遠くから山が白く見えていたため、「青山白化」と新聞に大いに報道され、「温州椅子墳」は迷信のシンボルとして国中に知られていた。

今回は、2010年3月23日～29日に、報告者は20年前に調査していた温州地区において、「温州地域椅子墳の変遷」というテーマで調査を実施した。調査地は温州地区の瑞安市であった。

夫婦、又は長男夫婦、その孫夫婦までの棺を一つの「椅子墳」に収まるものも、或いは「昭穆制」式で長男、次男、三男…と男兄弟は夫婦そろって両親の両側に順次並べる瑞安式の「平墳」のいずれも一家或いは一族の血縁単位で構成していたが、20世紀90年代に「破除迷信（迷信打破）」のスローガンにより、私有墓地の整理と田んぼにあった墓の移転が大規模的に行われた。国道線両側の見える範囲内の墓は移動されたり、取り壊されたりされた。血縁上に相互無関連の人々の遺骨は、普通「公墓」に収まるようになった。

今回の調査は、瑞安の山間部の「棋盤山」を中心に展開した。車で国道を走っている間にも一般道路を走った時にも、確かに道路から椅子墳や一般の墓が見えなかった。が、歩行で山を登っていくと、椅子の形の大きな墓と続々と出会った。新しく作って未使用状態の「生墳」「寿墳」や、すでに一人が入っている夫婦の墓、葬式が終わったばかりで紙製の花輪が多くおかれた墓など多くあった。その墓のほとんどはこの十年以内に作られたものである。墓整理運動により、姿が消えた地表に作られる椅子墳は、行政の規定「国道の見える範囲」を避けて山の奥地に、昔ながらの椅子の形の墓はいまも造り続けられていることは分かった。

聞き取りによると、地元の人々は依然、人間の座る心地のよい「太師椅」のような形の墓を好んで作る。「椅子の形が祖先にとって良い墓だ」と思っているし、慣習として現在も風字型の墓を「椅子墳」と呼んでいる。村に「公墓」を作っているが、一部の人は裏山に「椅子墳」を作っているのが現状である。しかし、昔は一族の墓、祖・子・孫三代を納まる家族式の墓はよくあったが、今回の調査に見当たらず、夫婦墓の形はほとんどであった。